

平成二十三年 度 中学 入学 試験 問題 用 紙 (第 一 回)

国 語

□ 次の文章をよく読んで、あとの各問に答えなさい。

自分をつくる読書といっても、確信を得るばかりが自分をつくる道ではない。むしろためらうこと、溜めることを「技」として身につけるのが、自分をつくる読書の大きな道筋だ。

本には実に様々なものがある。強烈な著者もそろっている。正反対の主張のものも店先では並んでいる。私は大学の授業では、学生に自主的なプレゼンテーションを、二分でしてもらうことにしている。そのときに、毎回同じ著者の作品を発表する者ができてしまう。これは非常に①狭いプレゼンテーションだ。そうした学生の特徴は、妙に自分の（実は著者の）意見に確信を抱いてしまっているということだ。十分な教養もできていないのに、数冊読んだだけで絶対の自信をもってしまうのは、いかにも危険だ。

多くの本を読めば、②一つひとつは相対化される。落ち着いているいろいろな思想や主張を吟味することができるようになる。好きな著者の本を読むだけでは、③こうした「ためらう」心の技は、鍛えられない。すぐに④著者に同一化して舞い上がるというのでは、自己形成とは言えない。

自己形成は、進みつつも、ためらうことをプロセスとして含んでいるはずだ。人間は努力する限り迷うものだと言ったのは、ゲーテだ。⑤一冊の絶対的な本をつくってしまうのならば、それは宗教だ。冷静な客観的要約力をもって、いろいろな主張の本を読むことによって、世界観は練られていく。(ア)もちろん青年期には、何かに傾倒するということがあっても自然ではある。(イ)一つの本を読めば済むというのではなく、その本を読むと次々にいろいろな本が読みたくなる。(ウ)そうした読書のスタイルが、自己をつくる読書には適している。(エ)⑥ためらうという、否定的な響きを持つているかもしれないが、ためらうことは力を溜めることでもある。一つに決めてしまえば気持ちには楽になるが、思考が停止してしまいがちだ。思考を停止させずに吟味し続けるプロセスで、力を溜めることができる。本を読んでいると、著者に直接反論できるわけではない。

自分自身でその違和感を持った本について人に話しているときに、違和感の正体に自分で気づくということもある。読書は、完全に自分と一致した人の意見を聞くためのものというよりは、「摩擦を力に変える」ことを練習するための行為だ。自分とは違う意見も溜めておくことができる。そうした容量の大きさが身につけてくると、⑦懐が深く、パワーのある知性が鍛えられていく。

ためらうことや溜めることを、効率が悪いこととして排除しようとする風潮が強まっている気がする。十代の後半などは、このためらい自体を雰囲気として味わうのがふさわしい時期であったのだが、現在は効率の良さを求めるあまり、ためらう溜めることの意味が忘れられかけようとしている。本を読むという行為は、この「ためらう溜める」という心の動きを技として身につけるためには、最良の方法だと思う。(齋藤孝『読書力』岩波新書の文による)

問一 線①「狭い」とありますが、何が狭いというのですか。次のア、エの中から適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 専門分野      イ 発表する時間      ウ ものの見方      エ 主張を聞く対象

問二 線②「一つひとつは相対化される」とはどういう意味ですか。次のア、エの中から正しい説明を一つ選び、記号で答えなさい。

- ア それぞれの本の、意見の違いを競わせて正しいものを見つげられるということ。  
イ それぞれの本の主張を、別の本の主張と比較して理解することができるということ。  
ウ それぞれの本の個性が均一化していき、どれも同じ本のように読むことができるということ。  
エ それぞれの本の持つ主張を混ぜ合わせて、自分だけの考え方ができあがるということ。

問三 線③「こころした『ためらう』心の技」とありますが、これはどういうことですか。その内容が示された部分をこれより前の本文中から二十五字以内で抜き出なさい。

問四 線④「著者に同一化して舞い上がる」とありますが、これはどういうことですか。本文中の言葉を使って四十字以内で説明しなさい。

問五 —— 線⑤「二冊の絶対的な本をつくってしまう」と同じ意味で使われている「絶対」は次のうちどれですか。一つ選び記号で答えなさい。

- ア この話は他人に絶対に言ってはいけない。
- イ 彼にとつて父親の言ったことは絶対である。
- ウ 一つだけ、絶対理解できない問題がある。
- エ しばらくは絶対安静にしなければならない。

問六 次の文は本文の四段落目から抜き出したものですが、これはどの部分に入りますか。本文中の(ア)～(エ)の中から一つ選び記号で答えなさい。

【しかし、その傾倒が一つに限定されるのではなく、傾倒すればするほど外の世界に幅広く開かれているというようであってほしい。】

問七 —— 線⑥「ためらう」と、否定的な響きを持っている」とありますが、その根拠を具体的に示している部分を、—— 部⑥より後の本文中から五字で抜き出して答えなさい。

問八 本文中の□の中の本文を並びかえたものとして正しいものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- A はつきりとは言葉にして反論できなくとも、その溜めたものは、やがて力になっていく。
- B 少し自分とは意見や感性が違うなと思うことももちろんある。
- C しかし、直接反論はできないので、その気持ちを心に溜めていく。
- D そして、別の著者の本を読んだときに、あのときに感じた違和感はこれだったのかと気づくこともある。

ア A↓B↓C↓D      イ A↓C↓B↓D      ウ B↓C↓A↓D      エ B↓A↓D↓C

問九 —— 線⑦「懐が深くパワーのある知性」とありますが、これはどういうことですか。次のア～エの中から最も適切なものを一つ選び記号で答えなさい。

- ア 自分とは違う意見や感性をたくわえて自分の力に変えた知性
- イ 強烈な著者の考えを溜めて確信となった知性
- ウ 冷静な客観的要約力によって練られた世界観を持った知性
- エ 自己流に読書のスタイルを作り出すことによって得た知性

問十 次のア～エは、本文の内容について説明したものです。これらを読み、正しいものには○、間違っているものには×をそれぞれ答えなさい。

- ア 青年期には一つの考えに傾倒しすぎることは危険である。
- イ 思考を停止させず吟味し続けるプロセスが、絶対的な主張を作る。
- ウ プレゼンテーションを充分に行う経験が読書力を育てる。
- エ ためらう心の技を身につけるのに、最適な手段の一つが読書である。

## 二 次の文章をよく読んで、あとの各問に答えなさい。

日本人は自然を尊び愛する気持ちが強い、とよくいわれます。ところが、その自然とは何かをつきつめて考えると、自然をめぐるその心は、①一定の生物種や美的に重要な自然界の個々の対象に焦点を合わせたものなのです。固有の価値をもつすべての自然を平等にあつかうという、人間中心の環境理論に対抗するディープ・エコロジー的な発想からの自然の賞賛とは②かなり異質のものです。

二〇一〇年三月に例れて話題をよんだ、鎌倉市の鶴岡八幡宮の大イチョウがよい例でしょう。鎌倉幕府の三代将軍源実朝が八幡宮の参拝を終えて石段を降りてきたところ、このイチョウに隠れていた二代将軍源頼家の子、公暁に暗殺されたという伝説から「隠れイチョウ」ともよばれている樹齢八〇〇〜一〇〇〇年の大イチョウが三月一日早朝、aトツゼン倒れたのです。さいわい根元から芽が出たので、大イチョウの再生を祈願するため八幡宮の神職や巫女の計八〇人と一〇〇〇人にもおよぶ参拝客が参加して、神事がおこなわれました。

春のお花見にしても、サクラの咲く公園や堤の全体が春らしくなってくるのを楽しむのではなく、サクラの花だけがbカシシヨウの対象ですね。歌川広重の『東都上野花見之図』でも、サクラ以外に識別できる植物はアカマツらしき木があるだけで、あとは背景としての緑が描かれているにすぎません。川堤の花見の席のまわりには、スマレやイヌノフグリやトキワハゼのかわいい花たちが早春を謳歌しているはずですが、一茶が詠んだ「鼻紙を敷て居れば葦哉」の気づかいで、まわりの多様な野草たちが演出している春まで楽しむことのできる現代の市民は、どれほどいるのでしょうか。サクラ公園やサクラ並木をつくるように、シバザクラやチューリップやパンジーを大規模に植えて、それだけを楽しむわけです。

在来の野草を楽しむ場合も、③同じ傾向がみられます。京都・廬山寺のキキョウの写真を見るかぎり、庭にはキキョウとコケしか生えていないようです。半自然の草原に咲くキキョウだけが抽出されたものであり、草原で主役になっているはずのススキやチガヤの姿は見あたりません。野草の多様性を楽しむための寄せ植えでさえ、それによって利益を得るという発想では、人目を引きそうな草花だけを選んで植えていくのです。

モンスーン気候帯に位置する日本は、四季折々の美しい自然と接することができる反面、台風に代表される暴力としての自然が襲いかかってくるのです。日本人はたえず自然のc脅威にさらされていますが、それを克服することはできず、耐え忍んできたので、自然を神として崇拜せずにはいられなかったのです。だからといって、自然の全体を神聖視していたわけではありません。

④古代日本人の自然崇拜は、稲作を中心に年々くりかえされる営みの中で、村人たちの守り神として祭られた自然の中にもありました。そこでは影響力の大きかった祖先を神としてあがめただけでなく、米つくりをする農民の生活に強いかかわる雨、雷、台風などの自然現象や、たたりを恐れた蛇、狼、猿や神霊が宿ると考えた大木、奇岩までもが祈りの対象となりました。八百万の神といわれるくらい多くの神様が、日本人が古くから信仰してきた神道にはいたっています。

神は、祭りのあいだだけ天から降りてきて、祭りが終わればまた本来のすまいに帰って行くと思われていました。そこで、神が降り立つための目印となる奇岩や大木のある場所に神殿を建て、神の社すなわち神社ができたのです。奈良・三輪山の大神神社のように山が御神体のところもありますが、一般に神殿周辺の木立までが神聖な場所となり、みだりに入ったり、人の手を加えてはならない鎮守の社になったのです。

いまでも日本全国には神社庁に登録された約八万五〇〇〇社の神社があり、そのほとんどに森や大木があります。自然崇拜と人格のある神を通しての祖先崇拜にもとづく日本固有の信仰である神道の心は、明治のはじめから第二次世界大戦が終わった翌年の一九四六年まで、国家の保護のもと全国の神社を通してd浸透していったのです。鎮守の社と一体化した里地と里山が近代日本人の原風景であったわけです。

日本でも日露戦争以降、明治も後半を過ぎると、重工業の発達による都市近郊の自然破壊が各地ですすんだのを背景に、ドイツの天然記念物保護運動の影響を強く受けた三好学博士の発案で、史跡名勝天然記念物保存協会が発足しました。協会を中心にeグントウを重ねてきた「史跡名勝天然記念物保存法」が公布されたのは、一九一九年のことでした。

二〇一〇年二月現在、国の天然記念物は九八〇件ありますが、三好博士には郷土愛のシンボルとしての巨樹や名木を保存する考えが強かったため、秋田県角館のシダレザクラ、千葉県清澄山の大スギ、東京都なら練馬白山神社の大ケヤキ、港区元麻布にある善福寺のイチョウ、御岳山の神代ケヤキなど、名木、巨樹、老樹といわれるものが数多く含まれるという特徴があります。鶴岡八幡宮の大イチョウは天然記念物ではありませんが、いまでも大イチョウという特定の生物に対する日本人の思い入れが強いのは、そこに神が宿っていると考えられるからでしょう。日本人に特有の自然崇拜とか自然を愛する心からはじまった生物の保護は、生態学の視点からの生物多様性(種の多様性)保全の考え方とはかなりかけはなれているだけでなく、先入観なしに、まずは⑤すべての種を平等にあつかうというアプローチをしにくいものにしていくのです。

日本には約五五〇〇種もの高等植物(シダ植物、裸子植物、被子植物からなる維管束植物をさす)が分布しています。しかし、日本人は特定の植物種や個体に対する関心が強いあまり、逆に緑とか草とか雑草として認識されてしまったら最後、その植物は多様性の要素になりにくいという面があります。一度、雑草のグループに属することにもなれば、在来種であっても、ほとんど考えることなく排除の対象にさえなるのです。ではどうすれば、日本の在来植物の多様性をとりもどすことができるのか。私は、個々の人間に固有の「環境世界」を拡大する可能性を大きくもつ、若いみなさんのパワーに期待せずにはいられないのです。

ヤーコブ・フォン・ユクスキュルは『生物から見た世界』(ユクスキュル、クリサート著、日高敏隆、羽田節子訳、岩波文庫)というひじょうにユニークな本の中で、個々の生き物(主体)が知覚できるすべてのもの、その主体の行動を一つのまとまりのある統一体としてとらえ、それを「環境世界」とよびました。そして、この環境世界はものを感じ、行動する主体によって異なることを強調したのです。

部屋という一つの空間を1人間の環境世界としてとりあげれば、椅子は座ること、まんなかの机は食事をとること、コップや皿は食事をとるための道具をイメージします。また、左側の机はものを書くこと、本棚は読書のための本があること、床は歩くこと、壁は障害物になること、ランプは光源をイメージするように、人間の目にとまったさまざまな像は、その行動に対応するいろいろな意味をもっているのです。

ところが、IIイヌの環境世界では、食べることをイメージする食器と、座る場所以外はずべて障害物としてイメージするでしょう。

Ⅲ 飛びまわるハエは、光源としてのランプと机の上の食物、それ以外の歩きまわる場所から環境世界ができています。

人間が主体の場合でも、きこりと少女では、その環境世界に描かれるカシワの木の様子はちがうのです(図)。森のどの木を切り倒すべきか決めかねている年老いたきこりの環境世界の中では、斧で切り倒されるカシワの木は大きさが問題であり、それを知るために正確な幹の太さを測ろうとしています。一方、この少女の森にはまだ、小人や森の精が住んでいます。そして、カシワの木が自分を恐ろしい顔でじっと見ているのに、ぞっとしています。カシワの木全体がこわい悪魔になってしまったのです。

日本人の場合、少女がカシワの木を恐れたのと同じ感覚で、鶴岡八幡宮の大イチョウを畏敬の念で見ているのです。だからといって、すべてのイチョウに霊が宿っているとは考えません。また、イチョウ、マツ、サクラ、ウメというように、個々の名前がわかる植物の数が驚くほど少ないのです。名前を知らないその他の植物は、環境世界の背景としての緑であり、造花でもあまり違和感を覚えないのです。なぜ、そうなってしまったのか、私には二つの理由が思い浮かびます。

一つめは、日本には五五〇〇種近くの高等植物が存在するのですが、国民が個々の種とじかに接触する機会がひじょうに少なくなったこととです。私たちの祖先は農耕民族でしたから、数多くの草や木と、たとえ名前はわからなくても常日頃から接していました。しかし、近年は日曜農業でも米づくりができるようになり、朝飯前の田まわりなどしなくなれば、農業をやっている昔にくらべて自然との接触が少なくなり、生き物が少なく、また生き物と接する機会の少ない都会人はなおさらです。

二つめは、小・中学校の教育の中で植物の名前を覚える機会がひじょうに少ないことです。ある小学校の先生の話では、日本の教科書に登場する植物の数が少なすぎるといふことでした。それでも樹木はましなほうで、トチノキ、ヌルデ、ハンノキ、レンゲツツジなど、都会の子どもたちにはなじみの薄いものまで含まれるのですが、草本類はひじょうに少ないのです。在来草本植物といえ、⑥ エノコログサ、オヒシバ、ススキ、ナズナ、タンポポぐらいでしょうか。せめて、春や秋の七草や俳句の季語になる草木の名前ぐらいいは、含めるべきだと思います。大人になってからでは、なかなか覚えられないものではありません。

現代人の環境世界に描かれる植物的な要素が小さくなり、しかもその中に含まれる在来草本植物の種類は教えるほどしかないのです。これでは、⑦ 生物多様性の保全をいくら訴えても、頭では理解できても、それをまもるといふ行動までにはいたらないでしょう。現代人の環境世界には描かれていないのですから、しかたのないことです。より多くの若いみなさんの環境世界の中で植物要素が拡大すればするほど、生物多様性を保全するための行動力は強固なものになるのです。

都市を緑化するための重要な視点は、その恩恵を受ける市民が喜ぶ緑をつくりあげることだといわれています。そして、現代の市民の多くが都市や公園にのぞむ緑は、外来植物を多く含むうるどりの美しい花や木や芝生のようです。そんな市民の環境世界では、帰化植物のオキケンイギクやナガミヒナゲシは人間と緑の共生のシンボルかもしれません。その一方で、在来野草のチガヤの白い穂や、よく見るとともかわいらしい花をつけているタチツボスミレやトキワハゼ、カタバミは雑草であり、除草の対象になることもありそうです。

若いみなさんだけでなく、国民のすべてが日本の身近な在来植物に五感で接する機会をできるだけ増やし、同時にその名前を覚えたり栽培したくなるような環境づくりが、生物多様性を保全するための基本なのです。いくら研究者やボランティアが自分たちの取り組んでいる生物多様性保全の事例を紹介しても、⑧ 一般市民の環境世界にはなりにくいのです。

(根本正之『日本らしい自然と多様性』 岩波ジュニア新書の文による)

※1 歌川広重：江戸時代の浮世絵師 ※2 小林一茶：江戸時代の俳人 ※3 御神体：神の霊が宿るとして礼拝されるもの

※4 畏敬：心からおそれ敬う

問一 —— 線 a ㄱ e のカタカナは漢字に直し、漢字はその読み方をひらがなで答えなさい。

a トツゼン      b カンシヨウ      c 脅威      d 浸透      e ケントウ

問二 —— 線「克服」とはどういう意味ですか。次のアㄱエの中から正しいもの一つを選び記号で答えなさい。

ア 努力して困難な状態を乗り越えること      イ 力の強いものがその力によって相手に従わせること  
ウ 良い関係を保ちながら一緒に存在すること      エ 状況を受け入れて見守ること

問三 —— 線①「一定の生物種や美的に重要な個々の対象」とはどんなものを指しますか。次のAㄱGの生物の中からその対象となるものすべてを選び、記号で答えなさい。

A サクラ      B アカマツ      C スミレ      D イヌノフグリ      E キキョウ      F チガヤ      G トキワハゼ

問四 —— 線②「かなり異質」とありますが、何と何が異質だというのですか。次のアㄱエの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 日本人の環境理論      イ 自然をめぐる日本人の心  
ウ 人間中心の環境理論      エ デイープ・エコロジー的な発想

問五 (1) 線③「同じ傾向」とありますが、次の中からこの傾向を示すものとして正しくないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 歌川広重の絵      イ サクラ公園やサクラ並木      ウ 一茶の詠んだ俳句      エ チューリップなどの植え付け

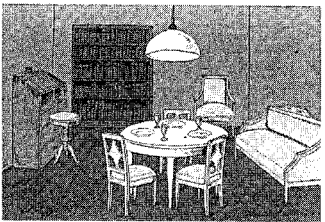
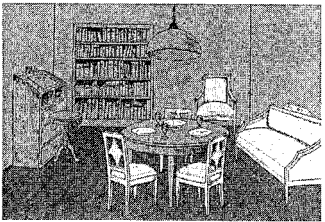
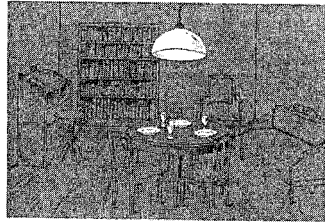
(2) (1)で示されたものにみられる「同じ傾向」とはどういう傾向ですか。二十字以内で説明しなさい。

問六 線④「古代日本人の自然崇拜」とありますが、古代日本人は聖域としていた場所をどのように呼んでいましたか。本文中から四字で抜き出して答えなさい。

問七 線⑤日本人は「すべての種を平等にあつかうというアプローチをしにくいものになっている」と筆者が言うのはなぜですか。その理由として適切なものをア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本人は人間中心的な環境理論に対抗するディーブ・エコロジー的な発想を持っているから。
- イ 日本人は史跡名勝天然記念物保存法を守ることに、強い関心を持っているから。
- ウ 日本人は野草の多様性を楽しむための寄せ植えにも、利益を得るという発想を持っているから。
- エ 日本人は自然に神が宿っていると考えているので、特定の生物に対する関心が強いから。

問八 線Ⅰ「人間の環境世界」Ⅱ「イヌの環境世界」Ⅲ「飛びまわるハエ」の『環境世界』の、それぞれの世界を示すのは、次のどの図ですか。ア～ウの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。



問九 線⑥「エノコログサ、オヒシバ、ススキ、ナズナ、タンポポ」のうち、秋の七草に含まれるものを一つ選び、答えなさい。

秋の七草：ハギ・クズ・ナデシコ・オミナエシ・フジバカマ・キキョウ・（ ）

問十 線⑦「生物多様性の保全」にはどんな視点が必要ですか。5ページの本文中から、その内容が示された部分を二十五字以内で探し、「く視点」となるように初めと終わりの五字ずつを答えなさい。

問十一 線⑧「一般市民の環境世界にはなりにくいのです。」とありますが、なぜですか。その理由を二つ、本文中の語句を用いて、それぞれ二十五字以内で説明しなさい。